

第66回 卒業式 学長式辞

2022.3.12 学長 西内みなみ

卒業生のみな様、ご卒業おめでとうございます。

今日の良き日は、みな様にとって特別な記念日となります。

新型コロナウイルス感染が収束しない中、この卒業式だけは、どうぞ挙行できますようにと、私たち教職員は、毎日、祈っていました。11年前、2011年の卒業式はできませんでした。なぜなら、今年と同じように、卒業式の前日が、あの3.11だったからです。短大は仮設の避難所となり、本当に辛く悲しい思い出が、記憶に強くに刻まれています。また、みな様の入学式は、政府の緊急事態宣言と福島県の緊急事態措置により実施できませんでした。何としても、みな様のこの卒業式だけは実施したいと祈りました。

今、コロナ禍より酷い悲劇が、私たちに襲いかかっています。血と涙が、川となってウクライナを流れています。もはや単なる軍事作戦ではなく、死と破壊と悲惨をまき散らす戦争です。犠牲者の数が増え、避難者、特に母親と子どもの数も増えています。コロナ禍で世界中が苦しむ中、人類はその英知を結集してパンデミックに立ち向かわなければならない時に、核戦争の危機が高まっています。

「わたしたちの平和を守る」という時、「わたしたち」が自分の家族や身の回りの人、同じ国籍を持つ人だけではなく、地球上のすべての人々になった時、初めて平和は実現します。この戦争で、命を奪われた方々、家族や故郷を失った方々のために祈りましょう。一刻も早く、全ての人々に平和がおとずれますように。

この2年間、最善を尽くし様々な感染予防対策を徹底しながら、原則として対面での授業を行うことができました。三密防止や外出自粛、限られた条件の中でも、皆さまは「まなび」と「つながり」を本当に大切にしてくださいました。皆さまにとってのこの2年間は非常に貴重な時間であり、その時間を少しでも実りあるものにしたいと私たちは願いました。

この危機的状況で、皆さまが、様々な工夫を凝らして実現して下さったあかしや祭は、まさにその希望を形にしたものでした。私たちはとても感動し、皆さまから勇気と元気を頂きました。本当にありがとうございました。

コロナ禍でも、みな様が互いに愛し合うことによって、建学の精神である「愛と奉仕に生きる良き社会人」になることを実践的に学んでいることが、よく分かりました。

この2年間、私たち教職員に、みな様の成長を共に喜ぶ幸せを頂いたことに、心から感謝します。また、多くのみな様が、たくさんの資格と免許を取得されました。本日は、極めて成績優秀・品行方正であった方を、みな様の代表として表彰させて頂きました。

こうした見える学習成果を得るためのみな様の努力には、はかりしれない価値と意義があります。生涯、自分自身の誇りとして大切にしてください。この2年間で、それだけ努力されたという証です。そして、それは、ご支援させて頂いた教職員の喜びでもあります。

桜の聖母短期大学は、学生一人ひとりが、喜び、賛美し、感謝することを学ぶ、聖母マリアの学校です。みな様が手にされた学位、資格、免許そして表彰を、ご自身の誇りにして下さい。そして、「愛と奉仕に生きる良き社会人」として、これからも誰かのために役立てて下さい。それが、今日まで、みな様と共に、喜び、賛美し、感謝してきた私たち教職員一同の願いです。

卒業生のみな様、今日という日は、これまでの人生の到達点であると同時に、これからの人生への出発点でもあります。これまでの人生への感謝と、これからの人生への希望を旨に、桜の聖母短期大学という学び舎を巣立って下さい。

そして、これからの人生という大海原で、お幸せな時、嬉しい時、楽しい時は、桜の聖母短期大学の事を忘れていて下さい。しかし、あなたの人生で、苦しい時、辛い時、悲しい時には、母校である桜の聖母短期大学のことを思い出して下さい。そして、何時でもいらして下さい。卒業生になられるみな様を、両手を広げてお迎えできる母校で在り続けることをお約束いたします。

保護者のみな様、高いところから、たいへん恐縮ですが、大切なお嬢様のご卒業、おめでとうございます。お嬢様のご卒業まで、多大なるご支援を賜りました保護者のみな様に、深く感謝します。ありがとうございました。

桜の聖母短期大学は、地域に深く根ざし、創立者聖マルグリット・ブールジョワの心をたずねながら、教育いちずにという「小さな単純な歩み」を続けます。人々から必要とされる「小さくとも教育で輝く」学校で在り続けます。

卒業生のみな様とそのご家族に、そしてこの桜の聖母短期大学に集うお一人おひとりに、主イエス・キリストと聖母マリア、聖マルグリット・ブールジョワの豊かな祝福をお祈りして、式辞といたします。